

## 大学での学びとキャリア教育をつなぐ —生涯発達心理学の視座から—

井下千以子  
桜美林大学

### 1. はじめに

桜美林大学の井下です。

初めに、自己紹介をさせていただきます。桜美林大学では教員が学系に所属し、そこから各教育組織に教えにいくという形をとっていて、私は心理・教育学系に所属しています。専門は心理学です。学部教育では基盤教育院に所属し、入学前教育や初年次教育の開発や運営などに携わってきました。また、リベラルアーツ学群では、生涯発達心理学や教育心理学の授業を担当しています。大学院の大学アドミニストレーション研究科では、大学職員を対象にした学生支援論の講義を担当し、学習論や発達論をベースとして、学生をどのように支援すべきかについて教えています。

### 2. キャリア教育の三つの課題

では、本題に入りましょう。

今、世界は大きく変わりつつあります。グローバル化が加速し、産業構造も転換しています。さらに、東日本大震災、それに伴って原子力発電所の事故も発生し、復興や事故の処理にはまだ課題が残っています。また、世界的な不況も容易には解決しないでしょう。こうした状況を改善しようにも、個々の企業や大学、学生個人の力は及びません。では、大学は何をすべきなのか。これを考えようということで、大学の生き残りをかけた施策として、現代 GP などでもさまざまなテーマが採択されました。エントリーシートの書き方指導や外部講師による就職授業、出口での就職斡旋支援など、定型化した訓練も行われるようになりました。

これまでのキャリア教育には三つの課題があったと、私は考えています。一つ目は、短期集中、単発的な取り組みだったのではないかということです。例えば、エントリーシートの書き方は初年次に集中して指導するといった具合です。二つ目は、就職試験を突破することを意識するあまり、学習が知識や技術の習得に偏っていたのではないかということです。三つ目はコースデザインについてです。科目が設定され、科目のデザインは考えられていましたが、果たしてそれだけでよいのでしょうか。

今日はこの三つの課題を踏まえ、発達、学習、授業という三つの観点からお話しします。特に生涯発達心理学の視座から、発達観の転換、学習観の転換、授業観の転換と話を進めます。さらに、私が桜美林大学で担当している初年次支援科目でどのようなキャリア教育を行っているかをお話しします。初年次から4年間にわたるキャリア教育が必要であることをお伝えできればと思っています。

### 3. 初年次支援科目「大学での学びと経験」について

川嶋先生のお話にもありましたが、キャリアの意味はどのように捉えればよいでしょうか。狭義には「職業」「履歴」「職務」「職位」、広義には「一生涯を通じた生き方、自己実現のあり方」「人間的成長」「アイデンティティの発達」ということになります。

私が担当している初年次支援科目「大学での学びと経験」は、2006年度に正課科目としてスタートしました。First Year Experienceの直訳を科目名として名づけたものです。スタート当初は私が担当する1コマでしたが、2007年度、桜美林大学が学部・学科制から学群制に変わったのに伴い、「大学での学びと経験」はリベラルアーツ学群の選択必修科目、全学群に共通する科目となり、コマ数も増えました。初年次支援科目でありながら、2年生以上の学生も履修できます。

「大学での学びと経験」の目的は、大学生活への適応、学び方を学ぶ、低年次からのキャリア支援です。目標は「学びの礎を築く」とし、仲間を理解する力、自分を見つめる力、表現する力、考える力の育成に力を入れています。この目的と目標を達成するために、15コマの授業で次の七つの取り組みを行います。

1)自己理解、他者理解。まず2人がペアになって互いに自己紹介し、次に6人～8人のグループになり自己紹介し合います。2)名刺交換。宿題として作ってきた名刺を授業で交換させます。3)上級生からのメッセージ。大学院生や卒業生を招き、勉強とアルバイトをどのように両立させたか、科目はどのように選んでいたかなど、自分の大学生活を語ってもらいます。4)アカデミック・ライティング、図書館活用、情報検索。5コマを充てています。5)将来のキャリアを考える。2.5コマを充てています。6)OBIRIN Graffiti。これは研究のプロセスを学ぶもので、初歩的なフィールドスタディです。学生がグループになり、大学で最も学びたいことは何か、何に最も力を入れたいかなど、自分たちで決めたテーマについて、教室の外に出て学生にインタビュー調査をします。得られた回答はKJ法で複数のカテゴリーに分け、分析し、発表します。研究のプロセスを学ぶというアカデミック・ガイダンスの側面もありますし、学生同士が協力してこそできることなので、仲間と連携するために何が必要かなどを学ぶ機会にもなると思います。7)ラーニング・ポートフォリオ。毎回の授業でワークシートを用い、将来のキャリアを考えさせています。ワークシートはポートフォリオに綴じ、最後の授業で自分が何を学んだかについて論証型の学びレポートを書きます。

### 4. 将来のキャリアについて考えさせる授業とは

将来のキャリアについて考えさせる授業についてご紹介します。去年の初年次教育学会で「初年次からのキャリア教育」というタイトルでも発表しました。先ほどお話したように、「大学での学びと経験」15コマのうち2.5コマを用いて行っています。今日は昨年度の授業についてお話しします。1クラス91名中、1・2年生76名を対象に分析を行いました。3・4年生には教室の前に出て、上級生からのメッセージとして1年生にどのようなことを期待するかを話してもらいました。3年生も自分のこれまでの体験を語ることによって、これからの学生生活を考える機会になったと思います。

授業の方法を見ていきましょう。まず行ったのは、アイデンティティ理論に関する解説です。ともに心理学の研究者である、エリクソン(Erikson, E.H.)の理論、マーシャ(Marcia,

J.E.)のアイデンティティの発達理論などについて少し話しました。次に、スタジオジブリの映画「耳をすませば」を見せました。将来について何も決まっていないう女の子と、バイオリン職人になるという将来の目標をしっかりと持ち、その実現に向けて頑張っている男の子、この二人が主人公となる映画です。これを見て、主人公のアイデンティティの発達過程をマーシャのアイデンティティ・ステイタスを用いて図式化させました。そして、アイデンティティが移行した原因についてグループでディスカッションをさせ、アイデンティティがいかなる要因によってどのように変わったかなどを図に描いて発表させました。男の子と女の子のアイデンティティに関する発達の違いについても考察させました。最後に、学生一人ひとりにワークシートを配布し、自分のアイデンティティ・ステイタスについて、高校時代、大学に入学した時、大学を卒業する時にはどうなっているだろうか、卒業して何年か経った時にはどうなっているだろうかというように段階的に分析させました。

## 5. アイデンティティ・ステイタスの4類型

今お話ししたアイデンティティの発達は、エリクソンの流れを汲むマーシャが、二つの軸によって四つの形に分類しました。これをアイデンティティ・ステイタスの4類型と呼びます。二つの軸のうち一つは危機 Crisis で、やりたいと思ったことについて選択に迷ったことがあるかどうか、もう一つは関与 Commitment で、自覚的に自分のすべきことを考えているかどうかです。4類型とは、アイデンティティ拡散、早期完了、モラトリアム、アイデンティティ達成です。

アイデンティティ拡散は、Diffusion の頭文字をとって D と略称します。将来こういうふうになりたいと、以前は考えたことはあるけれど、今はなりたいたいものはないので考えていない状態、あるいは将来のことは昔も今も考えたことがない状態です。

早期完了は、Foreclosure の頭文字をとって F と略称します。早い段階で目標が決まり、迷うことがない状態を指します。例えば、医者之家に生まれた子どもが、両親の影響を受けて自分も医者になろうと思ひ、大学の医学部に入学してからも志望実現に向けて努力している、といったケースです。問題がないように思われるかもしれませんが、つまずきに対して脆いという弱点があります。医者になろうとしている学生の例で言うと、解剖の時間に血を見て卒倒してしまったり、学生同士で医者役と患者役とに分かれて診察のデモンストレーションをしている時にコミュニケーションがうまくとれなかったりというように、目標を実現する上での支障にぶつかると、すぐに「自分は医者に向いていないのかもしれない」と悩みがちなのです。

モラトリアムは Moratorium, 略称 M で、模索中ということ。自分にさまざまな可能性があることは分かっているけれど、その中のどれが良いかは分かっていない状態です。

アイデンティティ達成は略称 A, Achievement の頭文字をとったものです。選択に迷い、苦悩した経験、選択したけれど挫折した経験がある人が、苦悩や挫折を乗り越えて、今新たな目標に向かって頑張っている状態を指します。Commitment の強い状態です。

昨年度の授業を履修した1・2年生のアイデンティティ・ステイタスを見ると、約9割は過去や現在において D や M の状態でした。それでも、卒業するまでには自分の進む道を見つけて A の状態になる、卒業後も A であり続けるという、安定的な将来像を描いていま

した。

## 6. 大切なのはアイデンティティ・ステイタスの移行

先ほどお話ししたように、自分のアイデンティティ・ステイタスを分析する前に、映画の主人公のアイデンティティ・ステイタスを分析するグループワークをさせました。学生の分析結果をご紹介します。主人公の一人、女の子については、映画の冒頭では将来について何も考えていなかったのですから D の状態で、そこから、自分は何をすべきか、何に合っているのかと考える M の状態になり、最後は小説を書きたいという目標を見つけて A の状態になる。つまり、D→M→A という変化が見られるとするグループが多数でした。もう一人の主人公である男の子については、映画の冒頭からバイオリン職人になるという夢を抱いていたことから、F の状態、最初から決まっていたのではないかと分析するグループが目立ちました。ただ、映画では描かれていないものの、後になって迷うかもしれない、つまり M になるかもしれないという意見もありました。

学生自身のアイデンティティ・ステイタスの分析結果では、卒業時は A であっても、卒業後の 26～30 歳頃に M となり、アイデンティティに迷いが生じるという回答が 5 名、いずれも 2 年生に見られました。その 5 名は 26～30 歳頃の自分を想定し、アイデンティティの状態を自由回答欄に次のように書いています。「このまま今の仕事でいいか」「想像していた仕事と異なり悩んでいる」「頑張っていた意味がわからなくなり悩み始める」「卒後 3 年で違う仕事に挑戦するが悩んでいる」「結婚や子育てで仕事を続けるべきか悩んでいる」。

将来のキャリアを考えさせる授業では、夢や目標を描かせるだけでなく、困難な問題や新たな環境に応じてアイデンティティ・ステイタスは移行することを伝えていくことが大切なのではないかと思えます。A から M への移行は退行ではなく、新たなアイデンティティを獲得するための、生涯を通じた発達として重要な意味を持つものであることを、初年次の段階から強調していく必要があるのではないかと、私は考えています。

## 7. 通過すべきイニシエーションが不在に

現代の青年、大学生のアイデンティティ発達の仕方は、エリクソンの時代の定型的な発達の仕方とは異なっていると言えます。

エリクソンの時代には、大学は少数のエリートだけが進む場所でした。エリクソンは、青年期を「心理社会的なモラトリアム」(Psychosocial moratorium)の年代と定義しました。モラトリアムとは執行猶予期間といった意味で、金融の方面では支払いを待ってもらおうという意味に用います。社会に出る期限を伸ばしてもらい、その間に修行を積み、自分がやりたい学問を学び、やりたいことを見いだしていく。大学とは、そうしたエリートのための修行の場でした。したがって、修行の場としての通過儀礼を超え、やりたいものを見いだすというイニシエーションがあったはずで

ところが、今は大学進学率が高まっています。現代の大学としてのモラトリアムは、やりたいことを見つける修行の場としてではなく、大人になることをただ先延ばしにする場として機能しているのではないのでしょうか。学生は大学で学ぶ目的が曖昧なまま、トコロテンのように出口に押し出されていっているように思います。大人への移行期が不鮮明である、つまりイニシエーションが存在しないのではないのでしょうか。初年次教育やキャリ

ア教育を行うことも、学生のためにただレールを敷いてあげているだけだとすると、通過すべきイニシエーションは不在のままです。学生は、なぜそれを行う必要があるのかを自分に問いかけることなく、大学時代を何となく過ごしてしまうことになりかねません。

## 8. 必要なのは一生涯につながる発達感の転換

アイデンティティ・ステイタスが入学時に M であった学生が、卒業時には A の状態になっていたとしても、それから3年ほど経った頃、また M になることがあるはずです。先ほど川嶋先生のお話に出た、就職して3年以内で離職する若者とは、このように M になった若者であると考えられます。M になった時に新たに目標を見いだせるかどうか、つまり再び A になれるかどうかの問題になりますから、M から A になれるような力を学士課程でしっかり育成する必要があるでしょう。

また、先ほどお話ししたように、A から M になることは決して退行ではありません。人間は生涯を通して M→A→M→A というサイクルを繰り返すことによって、成長していくのです。M から A に変えていくためにも、発達観の転換が必要だと考えています。

発達観の転換とは、短いスパンでの発達から、長いスパンでの発達、つまり学士課程4年間での発達、職業生活での発達、一生涯を通じた発達に変わるということです。このように転換してこそ、学生は広い視野に立ち、見通しを持って、「自分は何を学びたいのか」「何をしていきたいのか」を考えさせることができるようになり、大学での学びと経験の意味を見いだすことができると考えています。

発達観の転換によって、深い学びも得られるでしょう。そして、深く学ぶためには、知識を再構造化することも重要です。学んだことを自分にとって意味があるように知識を変換させていくのです。そのためには、教員は自分の授業だけではなくカリキュラムとして考えていかなければなりません。つまり、Discipline の教育が求められるのです。

## 9. FD は Curriculum development も重要

ディシプリン(Discipline)には、学問、学問分野という意味だけでなく、しつけ、訓練という意味もあります。学問分野の思考様式が埋め込まれているのです。その Discipline の中にさらに教養教育を埋め込み、Discipline での学習とアイデンティティの模索とが重なるような構造を持つ授業をデザインしながら、それをカリキュラムデザインとして考えることによって、知識変換型方略による学習が可能になるのではないかと考えています。それだけでなく、知識の再構造化型の授業へと転換させることも可能になるはずです。そういうことをキャリア教育として専門教育にも取り入れる必要があります。キャリア教育は、キャリア教育に特化した科目だけで行うのではなく、カリキュラム全体として行わなければなりません。いわゆる Enriched major の視点、これを筑波大学の金子元久先生は拡張専門型科目、ICU の絹川正吉先生は専門教養科目と呼んでいらっしゃると思いますが、こういった教養教育の視点を入れて専門教育を考えていくことが重要なのではないかと思います。

ここに、初年次教育、専門基礎教育、教養教育、専門教育という四つの視点から、学士課程カリキュラムにおける授業の関連を示した図があります。授業をアメーバに例えているので、授業アメーバと呼びます。この図のように関連した授業が、その日の授業内容、あるいはコースデザインによって形を変えながらカリキュラムの中でつながってまとまり、

それが層となって重なる中で学びが深まっていくのだと、私は考えています。

FDと言うと、Instructor developmentにばかり力が入れられますが、Curriculum developmentも重要です。アイデンティティの発達、人間形成を視野に入れた体系的なカリキュラムを開発する必要があるでしょう。そのためには、学びの先を見通す力を、学生も教員も職員も身につけなければなりません。これはキャリア教育だけでなく、全ての授業に共通すると、私は考えています。

ご清聴ありがとうございました。

## 大学での学びとキャリア教育をつなぐ

—生涯発達心理学の視座から—

井下 千以子

桜美林大学

1

## 変動する社会とキャリア教育の現状

変動する社会

キャリア教育の現状

加速するグローバル化  
産業構造の転換  
震災と原発問題  
世界的不況

↓

個々の企業や大学、  
学生個人の力が及ばない  
外部要因

現代GPの採択テーマ  
大学の生き残りを掛けた施策  
内実:定型化した訓練

- ・エントリーシート
- ・就職授業 ex.オトナ学
- ・様々なイベント
- ・出口での就職斡旋支援

2

2

## キャリア教育の課題

これまでの教育内容

これからの課題

- |              |          |
|--------------|----------|
| 1. 短期集中、単発的  | → 発達観の転換 |
| 2. 知識・技術学習偏重 | → 学習観の転換 |
| 3. コースデザイン   | → 授業観の転換 |

3

3

## 本発表の目的

大学でのキャリア教育の問題を  
生涯発達心理学の視座から考える



- ・ 発達観の転換
- ・ 学習観の転換
- ・ 授業観の転換



初年次からのキャリア教育  
↓  
学士課程4年間に渡る  
キャリア教育

4

4

## 「キャリア」をどう捉えるか

- ・ 狭義
  - 職業、履歴、職務、職位
- ・ 広義
  - 一生涯を通した生き方、自己実現のあり方
  - 人間的成長
  - アイデンティティの発達

5

5

## 初年次支援科目

「大学での学びと経験」

- ・ 2006「大学での学びと経験」  
初年次支援のための正課科目としてスタート
- ・ 2007～ 学群制へ  
リベラルアーツ学群の選択必修科目  
全学共通科目  
2年生以上の学生も履修

6

6

<目的>

- 大学生活への適応
- 学び方を学ぶ
- 低年次からのキャリア支援

<目標> 学びの礎を築く

- ① 仲間を理解する力
- ② 自分を見つめる力
- ③ 表現する力
- ④ 考える力

<7つの取組み>

7

- ① 自己紹介・他己紹介
- ② 将来のキャリアを考える



- ③ 名刺交換会



- ④ OBIRIN Graffiti



- ⑤ 上級生からのメッセージ



- ⑥ ラーニング・ポートフォリオ  
学びレポート



- ⑦ アカデミック・ライティング  
図書館活用、情報検索

8

7

8

将来のキャリアについて考えさせる授業

- 実施期間:  
半期15コマのうち、2.5コマを使って実施。
- 実施対象: 2012年度の授業  
履修者91名中、分析の対象としたのは76名  
リベラルアーツ学群1年25名、2年22名  
ビジネスマネジメント学群1年2名、2年27名

9

9

方法

- ① アイデンティティ理論に関する解説をおこなう。
- ② 映画を視聴後、主人公のアイデンティティ発達過程をアイデンティティ・ステータスを用いて図式化させる。
- ③ アイデンティティが移行した要因について、グループディスカッションさせ、図を用いて発表させる。
- ④ 学生自身のアイデンティティ・ステータスの発達過程を分析させる。

10

10

アイデンティティ・ステータスの4類型(Marcia,1980)

	ある/なし	過去に なし	模索の 最中	過去にあり
危機 選択に 迷ったこと はあるか				
関与 自覚的に 自分のす べきことを 考えてい るか	なし	あり	あるが 漠然と してい る	あり

11

結果

- 大学1, 2年の9割を超える学生が、過去や現在は、DやMの状態であっても、卒業期には自分の進む道を見つけてA、その後もAと安定的な将来像を描いていることがわかった。

高校 入学時 卒業時 5年後  
D → M → A → A

12

12

- 今回の調査では、卒業時のAから、将来を26~30歳に想定しMとなり、アイデンティティに迷いが生じると回答した学生が5名いた。いずれも2年生。

D → M → A → M

- 「このまま今の仕事でいいか」
- 「想像していた仕事と異なり悩んでいる」
- 「頑張っていた意味がわからなくなり悩み始める」
- 「卒後3年で違う仕事に挑戦するが悩んでいる」
- 「結婚や子育てで仕事を続けるべきか悩んでいる」と回答している。

13

13

### 考察

- 将来のキャリアを考えさせる授業では、
- 夢や目標を描かせるだけでなく、
- 困難な問題や新たな環境に応じてアイデンティティステータスは移行すること、
- 特にAからMへの移行を退行と捉えるのではなく、新たなアイデンティティの獲得は生涯を通じた発達として重要な意味を持つことを初年次の段階から強調していくことが必要なのではないか。

14

14

### 現代の青年(大学生)のアイデンティティ発達の変化

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• 古典的モラトリアム           <ul style="list-style-type: none"> <li>- 心理社会的モラトリアム</li> <li>- 自己の探求</li> <li>- 修行</li> </ul> </li> </ul> <p>↓</p> <p>イニシエーション</p> <p>↓</p> <p>A</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 現代のモラトリアム           <ul style="list-style-type: none"> <li>- 大人になることの先延ばし</li> <li>- 大学教育の空洞化</li> <li>- 大人への移行が不鮮明</li> </ul> </li> </ul> <p>↓</p> <p>イニシエーションの不在</p> <p>↓</p> <p>MAA<br/>MAMAサイクル</p> |
|--|--|

15

15

### 発達観の転換

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• 短いスパンでの発達           <ul style="list-style-type: none"> <li>- 初年次での教育</li> <li>- 就活としての教育</li> </ul> </li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 長いスパンでの発達           <ul style="list-style-type: none"> <li>- 学士課程4年間の発達</li> <li>- 職業生活での発達</li> <li>- 一生涯を通じた発達</li> </ul> </li> </ul> |
|--|--|



広い視野に立ち、見通しを持って考えさせることによって、「自分は何を学びたいのか、何をしていきたいのか」大学での学びと経験を自分に意味づけることができる。

16

16

### 学習観の転換

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• スキル学習           <ul style="list-style-type: none"> <li>- 定型的訓練</li> <li>- 基本様式の習得</li> <li>- 効率的、生産的</li> </ul> </li> <li>• 知識の積み上げ</li> </ul> <p>知識叙述型方略<br/>(knowledge-telling strategy)</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 深い学習           <ul style="list-style-type: none"> <li>- 学士課程4年間</li> <li>- 創造的学習</li> <li>- 発見的学習</li> </ul> </li> </ul> <p>→ 知識の再構造化</p> <p>知識変換型方略<br/>(knowledge-transforming strategy)</p> |
|---|---|

17

17

### 授業観の転換

コースデザイン → カリキュラムデザイン



- ディシプリンの教育 : 学問の思考様式や知識  
アカデミック・ライティング  
クリティカル・シンキング
- 教養教育 : 自分を深く見つめる  
自分は何に関心があるのか  
自分は何をしていきたいのか

18

18

- ディシプリンでの学習とアイデンティティの模索が重なるような構造を持つ「授業デザイン」

- カリキュラムデザインを視野に入れた授業のデザインが重要！

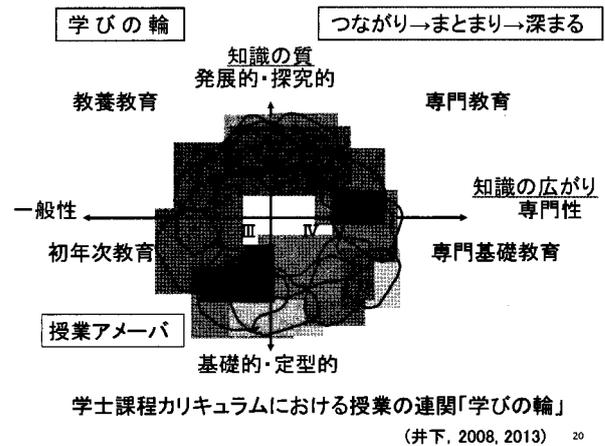


「知識変換型方略」を取り入れる。  
「知識の再構造化」が促進される。

- enriched major: 拡張専門科目、専門教養科目

19

19



20

## Curriculum Development

- カリキュラム全体に渡ってアイデンティティの発達、人間形成を視野に入れた体系的なカリキュラムの開発が必要。
- 学びの先を見通す力  
学生にも、教員にも必要。

21

21

### 引用文献

- 井下千以子 (2013)「思考し表現する力を育むー Writing Across the Curriculum の提案」関西FD編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』, pp.10-31.
- 井下千以子(2012)「初年次からのキャリア教育ーアイデンティティ・ステイタスを用いた分析の効果ー『初年次教育学会第5回発表要旨集』, pp.74-75.
- 井下千以子(2008)『大学における書く力考える力』東信堂.

ありがとうございました。

inoshita@oberin.ac.jp

22

22